



## 地獄を生き抜くためには

---

いつからだろうかー

自分が特別な存在ではない、と気づいたのは。

いつからだろうかー

劣等感しか感じなくなったのは。

子供の頃はあんなに早くなりたかった"大人"という名の憧れの存在。

だが、実際になってみると自分が思い描いていたものとは何もかもがかけ離れていた。

子供の頃はあんなにキラキラと輝いていた人生も、今では一寸先すらも見通すことのできない暗闇に包まれている。

毎日が苦痛で、毎日が地獄だった。

死にたい。

何度もそう思った。でも、私には死ぬ勇気すらなかった。まったくもって情けない話である。

この世は生き地獄だ。今ならアダムとイブを本気で恨むことができる。

同じ曲をまるで何度も何度もリピート再生しているかのような、変わり映えのしない現在(きょう)を、未来(あす)を生きる日々。

変わることはない、変わりようのない毎日。それが後何十年も繰り返されるのかと思うとゾッとする。

生きていくには人生は長すぎる。

これがゲームであれば迷わずリセットボタンを押しているところだが、現実ではゲームのようにはいかない。

この世には2種類の人間がいる。

掴み取った人間と。

掴めなかった人間だ。

私はどちらかといえば後者である。

掴み取れる数には限りがあり、掴めなかった人間は「不公平だ」と自分の人生を悲観し、泣きわめくしかない。

そもそもこの世に"公平"なんてものが存在するのだろうか。

私は存在しないと思う。

周りの環境、生まれもった外見等には確実に優劣が存在する。

それらはその人の人生に大きな影響を与えるものであり、その良し悪しによって生きやすいか、そうじゃないかが決まるといっても過言ではない。

公平というものは綺麗事でしかなく、この世は不公平で満ち溢れている。

そんなことを吠えることしかできない私も負け犬でしかないのだろう。

でも、どんな負け犬にも愛する権利と、愛される権利はあるはずだ。

どんなに長く、辛い人生であったとしても、愛する人と2人で歩めば暗闇にも一筋の光が差し込むかもしれない。いや、差し込むに違いない。

しかし、人生において"恋愛"とは、かくも難しいものである。

この地球上に数多といる異性の中から出会い、そこから恋愛に発展して、さらに結婚まで辿り着ける異性はほんの一握りしかいないだろう。

そんな異性と出会えることができるのはまさに"奇跡"とっていい。ある意味では宝くじで1等を当てるより難しいのかもしれない。

そういう異性と出会えるチャンスがあるという意味では、人生というのめあながち悪いことばか

りではないのかもしれない。

私は高校時代の先輩にこんなことを言われたことがある一

「良いことをすれば必ず良いことが返ってくる。悪いことをすれば必ず悪いことが返ってくる」

と。たしかにそうなのかもしれない。

"人生というものは結局のところプラスマイナス0になるようにできている"というのが私の持論である。

つまり、今どれだけ悪いことが続いていたとしても、後で同じ分だけ良いこともきつとある。私はそう信じたい。

そうでなければ、この"人生"という名のドラマはあまりにも駄作であるといわざるを得なくなる。

このドラマでは誰しもが主人公であり、そして誰しもが脇役でもあり、エキストラでもある。

それぞれにストーリーがあり、結末もそれぞれ違う。

先が見えないからこそ楽しめることもある。見えてしまっはつまらないことだってある。

そう考えると暗闇というのも悪くない。

たしかに、この世は地獄なのかもしれない。天国ではないのかもしれない。

それでも"生きる"という選択肢しかないのであれば、せっかくの人生なんだ、生きることを楽しまなきゃ損じゃないか。

人間は考え方1つ、物事の見方1つ、気持ち1つで変わることでできる生き物である。

たとえ結末がハッピーエンドじゃないとしても、精一杯生き抜こう。

死んでしまっはもったいない。

だって、人生はまだまだこれからじゃないか。

地獄を生き抜け。

人生に、自分に負けるな。

人生は戦いだ。